

青年海外協力隊員

しぽーと

お互いの価値観、生活様式、文化を尊重し、直接ふれあいながら、貧困問題、環境問題など、その国の抱える問題を解決し、経済や社会の発展に貢献することを目的に活動する青年海外協力隊。その青年海外協力隊の一員として2007年の6月から2年間、アフリカのジンバブエに言語聴覚士として赴任していた林謙太郎さん（西古泉）と、フィリピンに看護師として赴任していた十亀亜都美さん（上高柳）が、任務を終え帰国されました。

青年海外協力隊に参加したお二人が現地で何に悩み、何に感動したのか……。率直な“生の声”をお届けします。

青年海外協力隊員は、本来1つの国で2年間の任務に就くのですが、私の場合は事情があつて、2か国で活動しました。理由は、最初の任国であるジンバブエ共和国の経済破綻です。

知っている人も多いと思いますが、ジンバブエは近年ハイパーインフレ状態のため、物価上昇、貨幣価値の下落がすさまじいのです。現在はアメリカドル、南アフリカの通貨のランドが流通し始めてはいますが、状況はまだまだ良くありません。この原因や細かい情報を書き出すときりがないので割愛させていただきます。



水と食べ物があつて、友人、知人や家族がいて、
淡々と流れていく日常の幸せに気づいた

さて、私のジンバブエでの活動ですが、聾学校での難聴児に対する発音指導と、教員への指導法の伝達でした。しかし、経済、社会状況は悪化の一途をたどり、その影響による教員のストライキ、学校閉鎖、物資不足などで、活動や生活が困難になりました。そのため、任国変更を余儀なくされ、ジンバブエを9か月ほどで去ることになりました。

新しい任国は東アフリカ地域に属するウガンダ共和国でした。ウガンダは経済成長が好調で、物資は豊富、治安もそれほど悪くない状況です。ウガンダでの私の任務は、ジンバブエ同様聾学校での指導と、それに加えて、他の隊

員と協働してウガンダ国内での障害児教育の啓発でした。活動はおかげさまで充実していました。成果はどうあれ、活動できる場所があったことが嬉しかったです。

衰退していく国と上昇していく国の両方を経験できたこの2年間は最高でした。そして、水と食べ物があつて、友人、知人や家族がいて、淡々と流れていく日常が幸せなんだということに気づかせてくれた2年間でした。

profile

はやし けんたろう
林 謙太郎

職種：言語聴覚士

派遣国：ジンバブエ・ウガンダ

高校卒業まで岡田っ子として育つ。その後、愛媛を離れ10年後に縁あって松前の病院で言語聴覚士として4年間働く。それから青年海外協力隊に参加。